Ⅵ　結　語

1．縄文時代晩期末～弥生時代中期の土器

前述のように、今回の調査では、縄文時代晩期末～弥生時代中期と考えられる土器が出土した。大半は遺構に伴わない断片的な資料であり、その厳密な位置づけは困難である。

ここでは、北島遺跡の過去の調査で出土した弥生時代の土器も含め、ごく大まかにその様相と問題点に触れておくに止めたい。

(1)　縄文時代晩期末～その直後の土器

東北地方南部以南の東日本では、縄文時代晩期末からその直後にかけて、大洞A（A１・A２）式・A′式系の土器群や千網式・氷Ⅰ式など浮線文系土器群、そしてやや遅れて参入する条痕文系土器群や遠賀川式土器が絡み合いながら、当該地域の弥生黎明期の土器群を生み出してゆく複雑な状況が見られる。

この時期の土器の様相や編年については、近年の優れた研究（設楽博己1982、石川日出志1985ａ、鈴木正博1985・1987など）によって、しだいに光が射しつつあると言えるが、埼玉県域に限るとこの時期の資料は断片的であり、諸研究の成果と照合することが困難な場合も多い。

さて、本遺跡出土の三分岐の浮線文を持つ土器（第９図１）は、文様が直線化し、沈線文化している点から、嵐山町花見堂遺跡段階の浮線文土器よりも新しい様相と考える。田部井功による浮線文分類（田部井1985）では第四類に該当する。あえて近似する例を探せば、蓮田市関山貝塚、嵐山町屋田遺跡などが挙げられようか。花見堂遺跡段階の浮線文を「離山段階」（設楽1982、石川1985ａ）並行とすれば、本遺跡例は「トチガ原（氷Ⅰ式）」段階以降となろうし、花見堂遺跡を「〈花見堂〉段階（千網式３期）」（鈴木1987）とすれば、それよりも後出の段階と言える。概念の違いはあろうが、いずれにしても浮線文系土器群では終末に近い段階である。なお、屋田遺跡の縄文時代晩期終末第Ⅱ類土器は、本遺跡出土の第９図13に近似する。

第９図２は、やや古い可能性もあるが不明確である。

県内出土で、第９図６～11・17に近い例としては、川口市猿貝北遺跡第Ⅸ群第一類土器が挙げられる。この土器は、口縁部小破片であるが、本遺跡例と同様に、口縁部直下に幅広の平行沈線が施され、最も口縁に近い沈線に結節を持つものである。猿貝北遺跡では、この他に、細密条痕を施した後、口縁部直下に３条の幅広の平行沈線が施される小波状口縁の浅鉢など、細密条痕を地文とする土器群が出土している。

口縁部直下に幅広の平行沈線が施される深鉢や浅鉢は、中部高地の浮線文系土器群によく見られるところであるが、最も口縁に近い沈線に結節を持つ例が、長野県茅野市御社宮司遺跡の氷Ⅰ式の深鉢にある。有肩の深鉢で、体部には縦方向に細密条痕を施した後、縦方向に鋸歯状沈線文が描かれる。本遺跡例とは、相違点も多いが、こうした文様の系統が中部高地の浮線文系土器群に辿れる可能性は大きい。

なお、細密条痕については、近年では小林青樹の研究（小林1991）がある。小林は、細密条痕の出現を東北南部の大洞A式古段階と考え、関東・中部高地への波及を氷Ⅰ式段階とする。

本遺跡第15地点の、口縁下に狭い間隔をおいて断面三角形状の微隆起線を作出する深鉢（第13図57）については、明確な類例がみえない。強いて言えば、鈴木正博が「「荒海１式」比定の粗製土器様式」として挙げられた拓影（鈴木1985第10図３）が近い雰囲気を持っている。また、神奈川県横浜市杉田遺跡や長野県岡谷市経塚遺跡、同南箕輪村北高根A遺跡には、微隆起線ではなく稜である点や口唇のキザミは持たない点で相違はあるものの、関連がありそうな粗製深鉢が見える。長野の二例は、氷Ⅰ式段階の浮線文土器に伴っており、

杉田例も氷Ⅰ式段階の可能性がある。

第９図４・５の３条の平行沈線の最も下の沈線を上にえぐり込んでπ字状文を作出する技法は、氷Ⅰ式段階を比較的多く出土した深谷市上敷免遺跡（県事業団調査）に見られるが、いわゆる如来堂Ｃ遺跡の段階を間においた、四十坂（沖式）段階の再葬墓遺跡神泉村下阿久原平遺跡でも、埋設土器の甕の肩部文様にも観察される。このことが、この技法の継続期間が長いことを意味するのか、氷Ⅰ式段階と四十坂（沖式）段階の意外な近接性を意味するのか、ここで検討する余裕はないが、興味がもたれる。

(2) 弥生時代前期末～中期初頭の土器

第14地点③集中区出土の第10図18・19・(20)・21・22・24は同一個体の甕である。吾妻町岩櫃山鷹の巣岩陰遺跡・倉淵村上久保遺跡・松井田町上人見遺跡・藤岡市沖II遺跡など北関東西部を中心に見られる、口縁部がほぼ直立し、肩部に三角連繋文・菱形連繋文・変形工字文などの文様帯を持つ、いわゆる「岩櫃山系」甕形土器の一群に含まれるものと考える。

県内では、岡部町四十坂遺跡・神川町前組羽根倉遺跡・神泉村下阿久原平遺跡に類例が見られる。

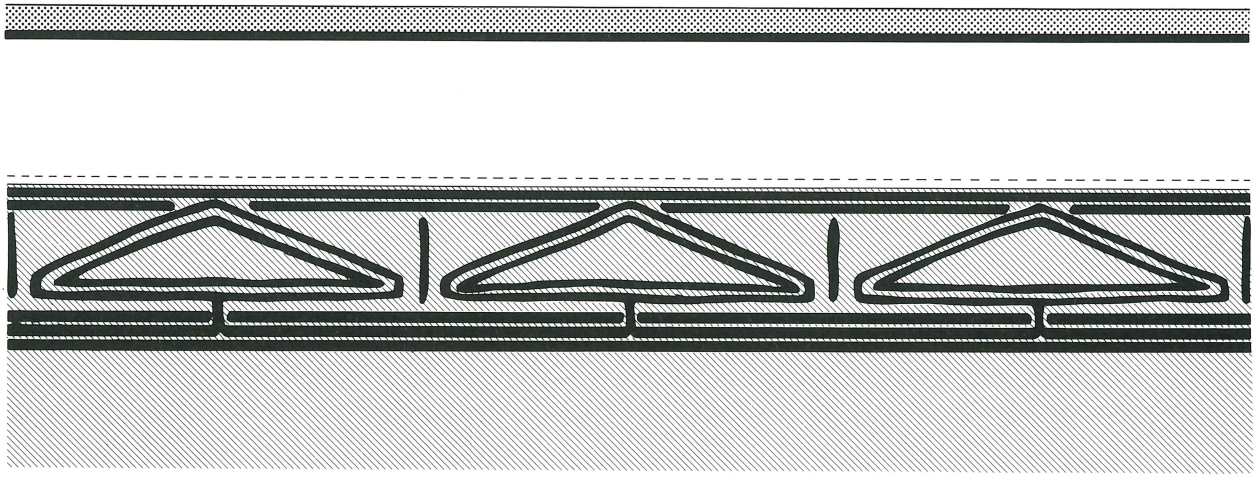
これら甕形土器については、近年では葛西功や石川日出志・斎藤進・若狭徹などの研究（葛西1984、石川1985ｂ、斎藤1990、若狭1992など）がある。

本遺跡例は、口縁部文様帯が未発達なこと、上下を平行沈線で区画された中に三角連繋文が一段のみ配置される幅狭の胴部文様帯を持ち、かつ、胴部文様帯の下限が胴部最大径を越えないことなどから、石川分類の甕形土器Ａ１に該当する。甕形土器Ａ１は、口縁部文様帯を欠如する他はＡ１と共通の特徴を持つ甕形土器Ａ２と多くの遺跡で共伴する。Ａ１は、下阿久原平遺跡・沖II遺跡・上久保遺跡・上人見遺跡・吾妻町四ツ沢遺跡・岩櫃山鷹の巣岩陰遺跡単独出土土器などに見られ、Ａ２は、岡部町四十坂遺跡・上久保遺跡・沖II遺跡などに見られる。上久保遺跡では、いわゆる遠賀川系土器が、沖II遺跡・上久保遺跡では水神平式土器が伴うとされる。近年、「沖式」として弥生時代前期末に位置づけられている一群である。

一方、「岩櫃山系」甕形土器でも、Ａ３・Ａ４に該当する岩櫃山鷹の巣岩陰遺跡Ｂ群などは、丸子式土器が伴うことも併せて弥生時代中期初頭とされている。前組羽根倉遺跡第１号再葬墓№４土器については、かつて、岩櫃山鷹の巣岩陰遺跡Ｂ群とほぼ同時期の畿内第II様式並行（新）段階と考えた（書上1985）。

さて、再び本遺跡例に戻ろう。本遺跡例の胴上部文様帯の三角連繋文（１図）は、他の四十坂（沖式）段階の三角連繋文と様相が異なり、縦区画沈線が加わったことを除くと、大洞Ａ′式の変形工字文の構成を比較的良く留めている。三角連繋文については飯島義雄や

１図　甕形土器の文様模式図



徳山寿樹の研究（飯島1988、徳山1989）がある。本遺跡例は、飯島分類に照らすならば、上人見遺跡例や四十坂遺跡舟形鉢例とともに第１類型となろう。

しかし、飯島も触れているように、これをもって、本遺跡例や上人見遺跡例が四十坂（沖式）段階の中で、古い段階に位置するかは難しい。検討は別に委ねるが、おそらくは、一系列ではなく、いくつかの類型が絡み合って共存したのが実態で、仮に甕の文様に採用されないとしても、例えば鉢などに古い文様構成が保持され、再び出現するような状況も考え得るかもしれない。

頸部と胴部上半の境に段を作出する例は、実見していないため、不明確であるが、美里町如来堂Ｃ遺跡・上人見遺跡・四十坂遺跡・沖II遺跡に有るようである。

同じく第14地点③集中区出土の条痕文系の壺（第11図32）は、特有の黄白色の胎土を持ち、搬入品の可能性が考えられる。「貝殻原体の波状文プラス横位直線文の紋様帯」（谷口1996）に該当し、丸子式に先行する中期最初頭段階（石黒1985、谷口1993・1996）とされる一群に含まれると思われる。

谷口は、「「丸子式」は中期の最古段階ではなく、やや遅れた時期に比定される」ことを強調し、波状文プラス横位直線文の紋様帯を持つ「条痕壺」と伴う段階すなわち「「岩櫃山」以前で、「中期の頭」の段階が確実に存在するはず」と言う。

本遺跡の場合も、前述の三角連繋文を持つ甕が、波状文プラス横位直線文の紋様帯を持つ「条痕壺」と同一集中区で出土したことをどう考えるのかが大きな問題である。沖式の土器群が、概して安易に弥生時代前期末に位置づけられることへの警鐘として聞いておきたい。各遺跡土器群の再検討が早急に必要となろう。

第１号再葬墓出土の甕（第８図１）は、「岩櫃山系」甕形土器と推定する。胴上部に広義の磨消縄文による文様帯が予測されること、胴下半部に半裁竹管状の原体を束ねた粗い条痕が施されることなど、前組羽根倉遺跡第１号再葬墓No.４土器に近似する点が多い。したがって、この土器の時期については、ほぼ前組羽根倉（岩櫃山Ｂ群）段階、下っても深谷市上敷免（再葬墓：平沢式）段階と思われる。

(3) 弥生時代中期前半の土器

第14地点弥生土壙群SK １出土の第８図２～４は、中型の細頸壺である。著しい風化のため、文様構成は不明な点が多い。細頸壺の頸部の沈線区画、縦走羽状文、縄文施文から、とりあえず、上敷免（再葬墓：平沢式）段階以降、熊谷市池上（池上式）段階までの幅の中でとらえておきたい。

第16地点の細頸壺については、区画文的な刺突列点文や鋸歯状沈線文などから、池上段階以降で、後述の上敷免（住居：御新田）段階まで下る可能性もある。

(4) 弥生時代中期後半の土器

既に報告がなされている北島遺跡第２・９・10・12の各地点の調査（浅野他1989、中村1989、大谷1991）においても、弥生土器が検出されている。これら北島遺跡でも北側の各地点で出土した弥生土器は、弥生時代中期後半以降に位置付けられる可能性が高いものが主体で、第14・15地点でみられるような中期前半以前にさかのぼり得るものは含まれない。

第９地点井戸跡出土の胴部上半に縄文が施された甕は、「吉ヶ谷式土器の祖型」として報告された池上遺跡甕４類（中島　宏1984）に含めて良いものと考える。

第９地点に隣接する第12地点では、２本同時施文沈線で波状文・直線文を描くもの、１本引き沈線で重四角文を描くものが出土している。細頸壺の頸部と推定される破片では、段を作出してそこに区画文的に刺突列点文を施す例がめだつ。これらに類似するものは、池上・小敷田遺跡の中にも若干含まれるが、深谷市上敷免遺跡Ｙ－３号・Ｙ－４号住居跡（瀧瀬ほか1993）に典型的な例が見られる。Ｙ－３号住居跡出土の細頸壺は、３本同時施文沈線による波状文と縄文が重層的に施文される壺である。頸部に２カ所、頸部と胴部に１カ所の段が作出され、刺突列点文が区画文的に施される。伴出した破片資料の中には２本同時施文沈線の例や重四角文を描く例が含まれる。注目すべきは、同

一住居から北島遺跡第９地点出土の甕と近似する池上遺跡甕４類が出土していることである。この共伴関係はＹ－４号住居跡や深谷市宮ヶ谷戸遺跡Ｙ－１号住居跡でも確認できる。

こうした組み合わせの土器群については、栃木県壬生町御新田遺跡（細谷・尾花1987）を基に、「御新田段階」（岩上・藤田1997）あるいは「御新田式」（石川1996・1997）として最近議論が活発になっている土器群との関連に注意がはらわれる必要があろう。御新田遺跡では、これらに東北地方南部の二ツ釜式、中部高地の栗林式が伴っているとされ、関東地方南部で宮ノ台式と共伴する「須和田」系土器についても、「御新田式」の系統で考えられるものが含まれるという（石川同上）。

池上遺跡の主体となる土器群（池上式）には、二ツ釜式に先行する南御山２式が明確に伴う。

北島遺跡第12地点では、前述の土器群に混じて、栗林式～百瀬式段階に相当すると思われる櫛描文系土器が出土している。今後、埼玉県北部における池上段階以降、寄居町用土平遺跡の段階以前の土器様相を考える上で、吉ヶ谷式土器の成立についても絡めて、大いに検討し、議論すべき問題と考える。

（書上 元博）

（追記）

今回の発掘調査において、第14地点で再葬墓に近接して、覆土内に焼骨片や焼土が多量に含まれる土壙群が検出されたことは、弥生時代初頭の再葬墓の性格や再葬プロセスを考える上できわめて重要な発見と言える。別項を設けて検討する予定であったが果たせず残念である。出来るだけ早い時期に機会を持つつもりである。

主要参考文献

愛知考古学談話会　1985『〈条痕文土器〉文化をめぐる諸問題―縄文から弥生―』資料編Ⅰ

1988『〈条痕文土器〉文化をめぐる諸問題―縄文から弥生―』資料編Ⅱ・研究編

浅野晴樹 他　1989『北島遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第81集

荒巻　実 他　1986『Ｃ11 沖Ⅱ遺跡』藤岡市教育委員会

飯島義雄　1988「所謂「三角連繋文」の構造とその系譜」『群馬の考古学』

石川日出志　1985ａ「中部地方以西の縄文晩期浮線文土器」信濃第37巻第４号

1985ｂ「関東地方初期弥生式土器の一系譜」『論集日本原史』

1996「東日本弥生中期広域編年の概略」『ＹＡＹ！』

石黒立人　1985「〈条痕文系土器〉文化をめぐる若干の問題」マージナルNo.５

井上尚明 他　1984『屋田・寺ノ台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第32集

岩上照朗・藤田典夫　1997「栃木県における弥生時代中期後半の土器群―『上山系列』の提唱―」栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要第５号

大谷　徹　1991『北島遺跡（Ⅲ）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第103集

葛西　功　1984「甕形土器の変遷（上）―関東地方の弥生時代初頭を中心に―」史館16号

書上元博 他　1985「神川村前組羽根倉遺跡の研究」埼玉県立博物館紀要12

栗原文藏　1960「四十坂遺跡の初期弥生式土器」上代文化第30輯

栗原文藏・石岡憲雄　1983「四十坂遺跡の初期弥生式土器再論」埼玉県立歴史資料館紀要第５号

群馬県考古学談話会　1983『第４回三県シンポジウム　東日本における黎明期の弥生土器』

1986『第７回三県シンポジウム　東日本における中期後半の弥生土器』

小出輝雄　1997「縄文時代末期から弥生時代中期前半の遺跡について」埼玉考古第33号

小林青樹　1991「浮線文土器様式の細密条痕技法」國學院大學考古学資料館紀要第７輯

埼玉考古学会　1976『埼玉県土器集成４　縄文晩期末葉～弥生中期』

斎藤　進　1990「関東地方における弥生時代成立期の様相」東京都埋蔵文化財センター紀要Ⅷ

設楽博己　1982「中部地方における弥生土器の成立過程」信濃第34巻第4号

杉原荘介　1967「群馬県岩櫃山における弥生時代の墓址」考古学集刊第３巻第４号

杉原荘介 他　1969「殿内（浮島）における縄文・弥生両時代の遺跡」考古学集刊第４巻第３号

鈴木正博　1981「「荒海」断想」利根川１

1983「「如来堂」事情」利根川４

1985「「荒海式」生成論序説」『古代探叢Ⅱ』

1987「埼玉県に於ける縄紋式の終焉」『埼玉の考古学』

関　義則　1983「須和田式土器の再検討」埼玉県立博物館紀要10

田中国男　1944『縄文式弥生式接触文化の研究』

田部井功　1985「縄文晩期・浮線文土器の研究―文様の構造と系統について―」『古代探叢Ⅱ』

滝瀬芳之・村田章人　1993『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第124集

谷口　肇　1993「条痕紋系土器の東方への伝播と変容」『翔古論聚―久保哲三先生追悼論文集』

1996「条痕壺覚書」『YAY！』

徳山寿樹　1989「北関東西部における弥生前半の有文甕形土器―「縦区画」・「縦区切り」系土器群について―」土曜考古第14号

中島　宏 他　1984『池守・池上』埼玉県教育委員会

中村倉司　1989『北島遺跡（Ⅱ）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第88集

中村五郎　1982『畿内第Ⅰ様式に並行する東日本の土器』

1988『弥生文化の曙光―縄文・弥生両文化の接点―』

蛭間真一 他　1987『上敷免遺跡』深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書

星田享二　1976「東日本弥生時代初頭の土器と墓制」史館７号

増田逸朗 他　1980『甘粕山』埼玉県遺跡発掘調査報告書第30集

村田章人 他　1994『清水上遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第152集

吉川國男　1982「西関東における弥生文化の波及について」埼玉県史研究第９号

吉田　稔 他　1991『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集

若狭　徹　1992「北西関東における弥生土器の成立と展開」駿台史学84

1996「群馬県地域」『YAY！』